塚原研究員の日記

來夢檸檬

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＳＣＰ―５４８―ＪＰは、オブジェクトクラスＮｅｕｔｒａｌｉｚｅｄに認定されました。

ＳＣＰ―５４８―ＪＰは音を発さなくなったため、サイト―８１????内の低危険度物品収容ロッカーの中に収容されています。

目　次

塚原研究員の日記

久々に休暇を貰った。まぁ、研究していたＳＣＰがＮｅｕｔｒａｌｉｚｅｄに認定されてしまい、研究材料がなくなってしまったからではあるが。

…いや、研究材料では無い。あれは、あの子は、見守る対象だった。いつだが、ＳＣＰに感情移入をして懲戒をくらった研究員もいたらしい。それに比べれば、私は懲戒をくらわなかっただけマシか。

久しぶりにサイト内を出た。さて、どこに行こう…なんて考えたところで、行く場所は決まっていた。

新幹線とタクシーを使って、私は??県の〇市に向かった。久しぶりにここに来る。あの日は大雨だったが、今日はカラッと晴れている。眩しいくらいだ。

歩道には今も献花が添えられている。私は持ってきていた献花とお菓子を添えて手を合わせた。さすがに道路にはもう血の跡はなかった。

ふと、通行人が声をかけてきた。

「あの日は酷い雨でしたね」

「…もしかして、事故を目撃した人ですか？」

「えぇ、確か、ピアノコンクールに行く予定だった子供でしょう？可哀想に…あぁでも、こんな話を知っていますか？」

「話？なんでしょう？」

「あの子、車に跳ねられて数メートルも吹き飛んでしまったんです。けど不思議なことに、あの子がさしていた傘がね、あの子の頭を濡らさないように覆いかぶさっていたんです。」

「…なるほど、傘が」

「その時、私、確かに聞いたんです。ピアノの音色を。どこから聞こえてきたかは分かりません。けど、どこからともなく。曲名は分かりません。けど、どこか儚げな声が、私の傘を叩く雨音に交じって」

「…そうですか」

「ふふ、信じてくれるんですね。他の人に話しても信じてもらえな

かったのに」
「ええ、信じますよ。たとえ幻聴だったとしても、あなたにはそれが聞こえた。なら、疑う必要はありません」
「…私も、手を合わせていいですか？」
「ええ、もちろん」
……財団には黙っておこう。本当なら記憶処理物だが、彼女は「傘から聞こえた」とは言っていない。あくまでも幻聴だと。なら、聞こえてもおかしくは無い。幻聴なんて、誰でも聞くようなものだ。
お墓は綺麗に掃除されていた。名前の欄には先祖の名前と一緒に、真新しく、幼い少女の名前が書かれていた。
私は持ってきた線香に火をつけて供え、手を合わせた。この子と私に因果関係はない。けれど、彼女の成長を見守った者として、手を合わせた。
彼女の親も、ピアノコンクールに出た他の子供たちも知らない、彼女の成長。雨が降っていた時だけ行われた、秘密のコンサート。
まるで我儘な少女のように、褒めれば上手くなり、罵倒すれば怒る。なんて素直な音色を奏でるのだろうか。彼女を超えるピアニストはいない。世界で唯一、死してなおピアノを引き続けた少女。
…サイトに帰ったら、きっと新しいＳＣＰの研究をするのだろう。けれど、私は忘れない。あまりにも無垢で、素直で、努力家だったピアニストの事を。
私はお墓を後にした。雲ひとつない晴天。晴れ渡る空に向かって、私は思わず拍手をした。お墓の中で拍手など不謹慎だが、私以外には誰もいないから、まぁ問題ないだろう。こんな晴れ空では、彼女は怒るだろうか。ピアノが弾けない、上手くなれない、と。
さぁ、盛大な拍手で見送りましょう。
晴れた心に、もう傘は必要ないのだから。